

T1A3

22E94

(A43)

明治廿七年二月八日
文部省檢定濟

本弘道會々長 西村茂樹校定
學士 天野爲之謹輯
生徒常用科

小學修身經

卷四

東京 富山房藏版

勅語

朕惟フニ我皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ
我が臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ
此レ我が國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ
孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ボ
シ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ
世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ
以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ是ノ如キハ獨リ朕ガ忠良ノ臣民タ
ルノミナラズ又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我が皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ
所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニヒンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽



勅語奉答

勝安房作

あやに畏き	天皇の	あやに尊き	天皇の
あやに尊く	畏くも	下し賜へり	大勅語
是どめでたき	日の本の	國の教の基	なる
是どめでたき	日の本の	人の教の鑑	なる
あやに畏き	天皇の	勅語のまゝに	勤みて
あやに尊き	天皇の	大御心に	答へまつらむ

小學修身經卷四

尋常科
生徒用

目錄

- | | | | |
|-----|-----------------------------|------|----------|
| 第一課 | 尊皇 | 第十課 | 讒謔を守るべきと |
| 第二課 | 菅原道真公 | 第十一課 | 正直 |
| 第三課 | 孝行 | 第十二課 | 謹慎 |
| 第四課 | 川井正直の孝行 | 第十三課 | 出来助の立身 |
| 第五課 | きう女祖母に事ふ | 第十四課 | 麻潔 |
| 第六課 | 友悱 | 第十五課 | 佐藤直方 |
| 第七課 | 長右衛門 | 第十六課 | 改過 |
| 第八課 | 友を擇ぶべし | 第十七課 | 土屋總藏の話 |
| 第八課 | 水はうつは <small>(皇后陛下)</small> | 第十八課 | 女子訓 |
| 第九課 | 細井徳民 | 第十九課 | 河瀬春女 |

第二十課 修學

第三十二課 高橋傳五右衛門のと

第二十一課 塙保己一

第三十三課 博愛

第二十二課 勤勉

第三十四課 和氣法均のはな

第二十三課 中島藤右衛門の事

第三十五課 剛毅

第二十四課 節儉

第三十六課 高田屋嘉兵衛

第二十五課 綾部道弘の儉約

第三十七課 名和長年王事に勤む

第二十六課 忍耐

第三十八課 遵法

第二十七課 『底ひなき』の歌

第三十九課 愛國

第二十八課 原田左馬之助

第四十課 勅語を奉戴すべし

第二十九課 報恩

第三十課 元助主恩を忘れず

第三十一課 公益

小學修身經卷四

尋常科
生徒用

西村茂樹校 定

天野爲之謹 輯

第一課 尊皇

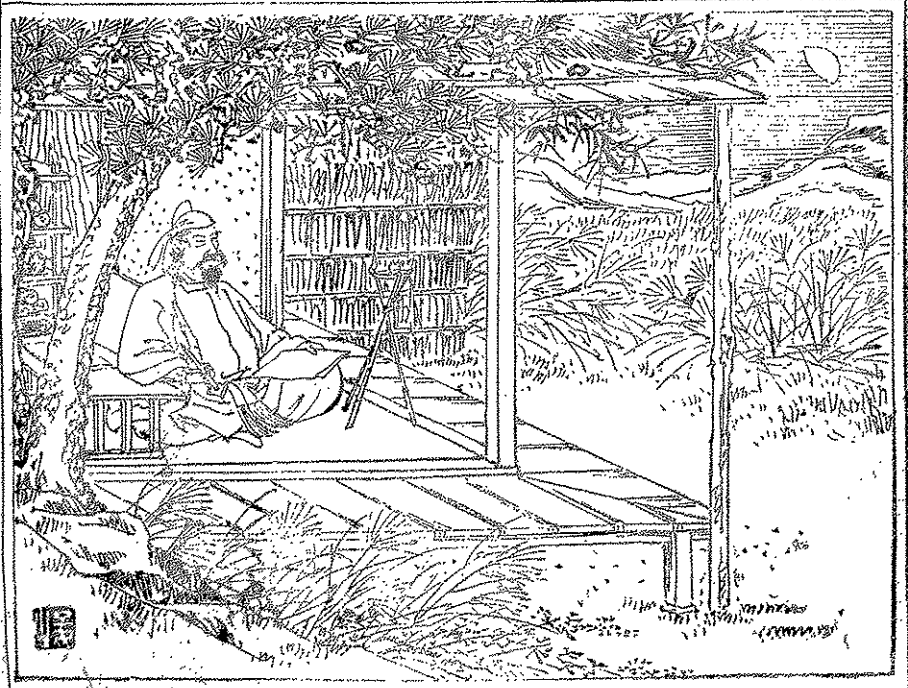
あが大日本國を治めたまふ 天皇は、か
ゝこくも 天照大御神の御裔にして、た
ほむかゝより今に至るまで、御系統一す
ぢに傳はり、皇威いや榮に榮にて、寶祚

の隆たかなることは天地と窮きうりな。これわが國体の萬國にすぐれたる所以なり。あれらはすべてこの國の臣民なれば、皇室を宗家とあふぎ、天皇を敬ひ奉りて、忠勤をつくすべし。これわが祖先よりな。來れるところにして、あれらが一日も忘るまじき事なり。

第二課 菅原道眞公

菅原道眞は、參議是善よしの第三子にして、幼き時より學問を好み、材徳人にすぐれしのみならず、忠義の志また深かりし人なり。

その頃藤原氏の威



權つよく、あがまゝの振舞たほかりゝを、
宇多上皇慨かせたまひて、道眞をゝて
醍醐天皇を輔佐せゝめたまひゝかば、道
眞恩命の有難きに感ゝ身をさゝげて君
恩に報い奉らんと、日夜心をくだきたり。
ゝかるに、時の左大臣藤原時平、道眞の威
名をねたみ、なき罪を構へて 天皇を欺
き奉りゝかば、道眞つひに官をやめられ、

筑紫の國に貶せられたり。
されど道眞は、配所にいたりてのちも、つ
ねに 天皇の御事を忘れず、かつて賜は
りゝ御衣にむかひて、毎日禮拜を怠らざ
りきとぞ。

第三課 孝行

あれらが生れいづるより、成人するまで、
父母のなゝたまふ辛苦はいかばかりぞ。

をさなきときはかひなにいだき、乳房を
ふくませ、一日も早く成人せよとねがひ、
やゝ長じては學問を習はせ、技藝をそし
つゝ、たまゝやまひあればみにかへても
速にいえんことを祈るなど、父母はつね
に子のために身体を苦め、心をいたまゝ
むるものなり。されば人の子としては大恩を
あずかるゝことなく、つねに孝行を

つくして、父母の體を養ひ、父母の心を安ん
ずべし。いかにすぐれたる才能ありとも、父
母に不孝なるものは、人として人にあらず。
父母はつねに其子の立身出世を願ふも
のなれば、たのゝく學をはげみ、業をつとめ、
世に仰がるゝほどの人となり、父母の名を
も顯すべし。これ孝の最も大なるものなり。
人のれやの心はやみにあらねども子をたもふ

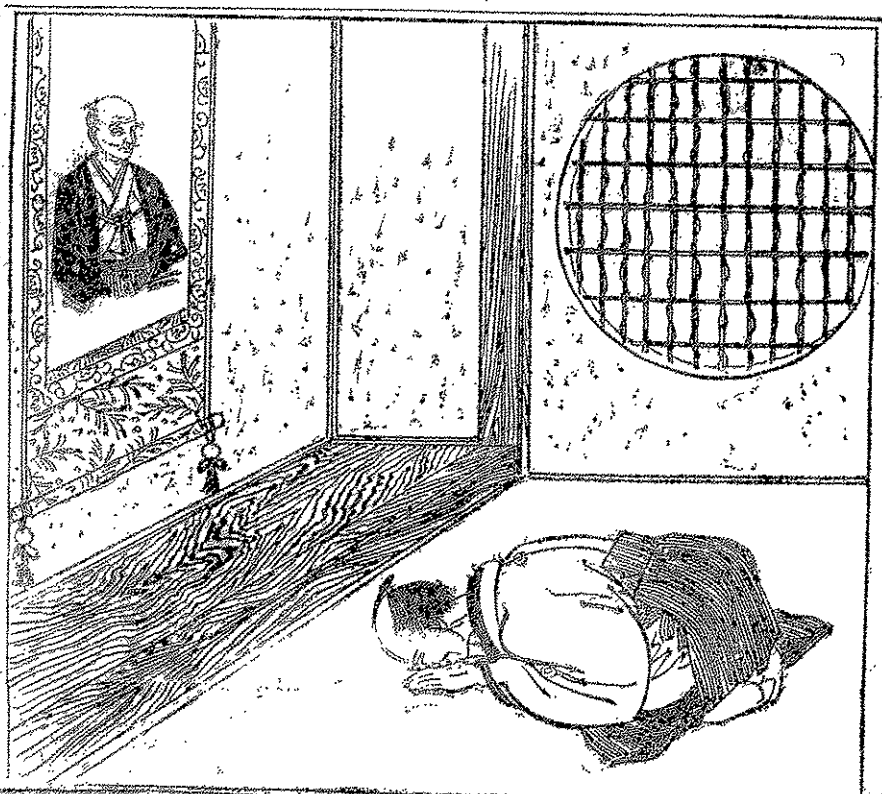
みちにまよひぬるかな

第四課 川井正直の孝行

川井正直は京都室町の人なり。年五十の頃、小學といふ書を読み、はじめて父母をれろうかにせうことを悔い、うれよりのちは生れかはりたる如き孝行の人となり、父母酒をきらひうかば、わが身も酒をたちてのまず、うの外父母のいみぎら

ひうことは、改めずといふことなかりき。

うののち父病にかゝりうに、正直看病に力を盡せること一方ならず、父うせうのち



は、かなうみにたへかねて、食も咽に下らず、母もまたついで世を去りしかば、哀痛ことに甚しく、父母の靈を祭ること四十餘ヶ月のあひだ、始終一日の如くなりき。さてうれよりのちも、父母を慕ふ心いよく、ふかく、人とかたりてなき父母の事にれよべば、涙あふれてやまざりきといふ。

かぎりあればけふぬぎすてつ藤衣はてなきものはなみだなりけり

第五課 きう女祖母に事ふ

きう女は、出羽の商人次郎兵衛といふものゝ女なり。五ツの時母にあかれ、家には六十あまりの祖母あり、家貧くくて、父は商賣に暇なかりしかば、きう女はうの頃七才なりしに、一人にて祖母の世話をな

たり。

祖母中風といふ
病になやみて、立
居も自由ならざ
りゝを、きう女は
介抱いたらぬこ
となきのみなら
ず、父より賜はり



生徒用

ゝ小遣錢を貯へれきて、祖母がたゝめる
煙草を買ひてすゝむるなど、をさなき身
にて孝養たぐひなかりき。この事領主に聞
にて、米若干を賜はり、其志をほめられたり。
孝は百行の本

第六課 友悌

兄弟は同ゝ乳をのみ、同ゝかひなにいだ
かれ、同ゝく父母のめぐみをうけて生長

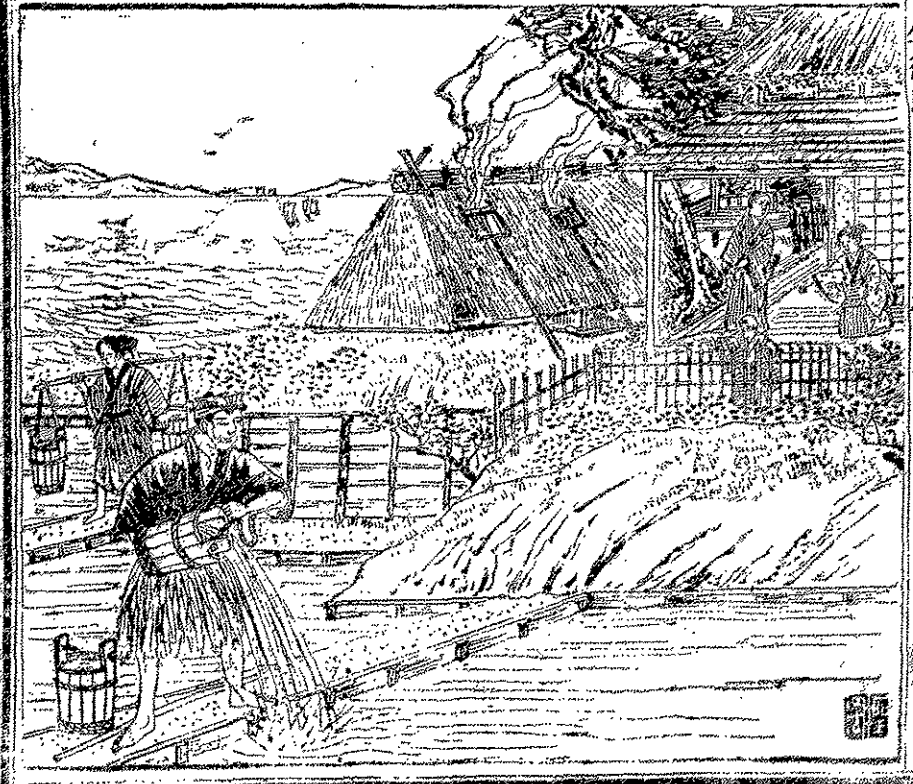
せらるものなれば、父母をのぞきては兄弟
ほど親あつきものなり。且、人のいのち限
ありて、父母世を去るのちも、兄弟は跡に
のこりて互に相慰むることをうるもの
なれば、兄弟の親は最も久きものなり。
されば兄は弟を愛すること深く、弟は兄
を敬すること篤く、始終渝ることなく、兄
弟相愛し、相助けて、互に家を興さんこと

をつとむべし。

第七課 長右衛門

阿波國に長右衛門といふ人あり。その兄
は左兵衛といひて、愚なるうまれつきに
て、その日のくらゐたつるあざもくらざ
りしを、長右衛門はその妻とともに、かひ
がひしくいたはりて、あが身はめづつか
ひのごとくはたらきたり。

うののちや、ゆ
 たかになりゝか
 ば、兄の妻子をも
 むかへとりて、一
 ツ家にすまはせ
 ゝが、兄は愚なる
 生れつきなれば、
 をりくゝわがま



ゝのことなどあれども、長右衛門夫婦はす
 ところも厭ふ色なく、父母につかふるが如く
 事へ、兄のむすめ二人をもろれぐせあゝ
 て、よきところへはんづかせたりといふ。

第八課 友を擇ぶべし

(一)

人と交るにはよき友を擇ぶべし。
 麻の中の蓬は矯めざるに自ら直しといふ

ことあり。蓬はすぐならざるものなれども、
麻の中にまぐりて生ずるときは、麻とど
もにれひたちて、自らすぐになるものなり。
人もこれと同じく、よき友に交るときは、自
ら善き人となり、悪しき人に交るときは、
らずく悪き道に入るものなり。古き語に
水は方圓の器に順ひ人は善惡の友による
といひ、慎みてよき友を友とすべし。

(二)

水はうつは(皇后陛下御製唱歌)

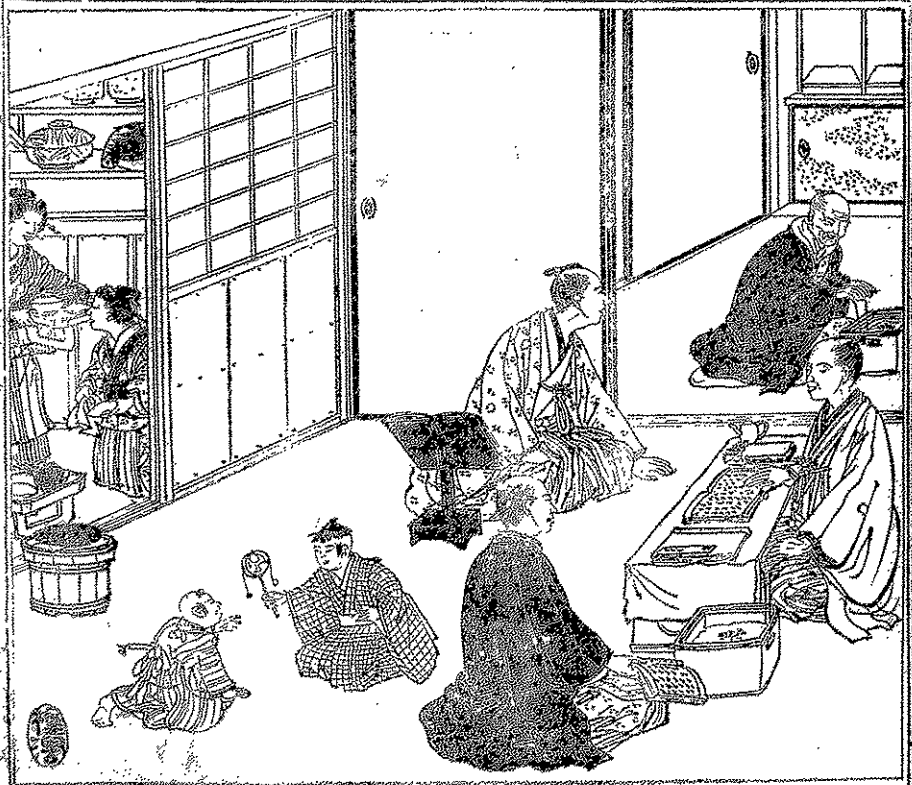
水はうつはに、うたがひて、
うのさまぐに、なりぬなり。
人はまぐはる、ともにより、
よきにあしきになりぬなり。
れのれにまさる、よきとをも、
にらびもとめて、もろともに、

心のこまに、むちりちて、
まなびのみちに、すゝむべし。

第九課 細井徳民

細井徳民は友だちと交りて極めて親切
なり。かば、友だちも亦徳民に交ること
兄弟の如くせり。中にも、小川某、飛鳥某と
いふ二人は、皆うの妻子をひきつれて徳
民の家に同居し、徳民の父に事ふること

實の親につかふ
るがごとくなり
しかば、人々これ
をみて、徳民の父
は三賢子、三孝婦、
三順孫をもちた
り。まことに幸福
の人なりなど噂



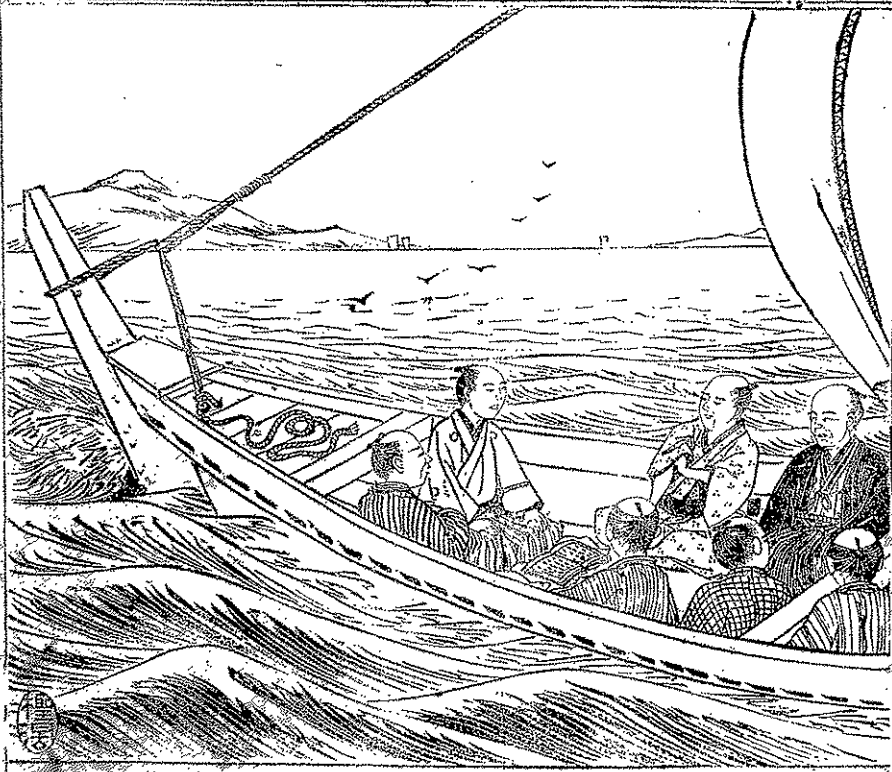
あへりどぞ。

人と恭うして禮あれば四海のうち皆兄弟なり

第十課 謙讓を守るべきと

人にむかひて、知りたることをほこりが
ほにいひきかすは、わが身のすぐれたる
ことを知らせんとて、かへりてうの不能
をうめすものなり。ふかく物をうれる人

ほど、かるく
くはことばにい
ださぬものなり。
貝原益軒先生は、
よに名高き學者
なるが、ある船路
にて、乗合船の中
に一人のわかも



のありて、坐中に先生ありともゝらず、もの知り顔に學問の話をなゝゝを、先生はこれをきゝて、なにごとをもいはざりゝに、のち船岸につきて、たのゝく姓名をつぐる時、かの若者はゝめて先生の姓名を聞き、さすがに恥ぢて逃げゆきたりといふ。

言ふものは知らず知るものは言はず

第十一課 正直

虚言は極めたる惡事なれば、戯にもいふべからず。一度虚言するとき、忽ち人の信用を失ひ、たとひ、まことのことをいふとも、何人も相手にせざるにいたるべし。人と約束しては必ずこれを守るべし。守りがたうと思ふことは、初より約束すべからず。一旦約してこれに背くは即ち虚

言をいひたるものなり。

第十二課 謹慎

二日の計はその朝にあり一年の計は元旦にあり』といふことあり。物事はあらかじめ其行末を思案して、大かたの計をなされかざれば、誤ること多きものなり。あかき時は血氣盛にして、前後の考もなく、目前の慾のために一生の悔をのこすこと

あり。つゝみれざるべし。すべてのこと、靜に思慮してのち取掛るべし。もゝ一たびにて定めがたくば、再び三たび思案してのち行ふべし。人の一生はながきに似て長きにあらず。あかき時注意して計をなさざれば、身のれちつき定まらぬうちに、よはひ忽ちかたぶくべし。うのどきにいたりて百千度くゆども、かひなかるべし。

第十三課

出來助の立身

豊臣秀吉公天下

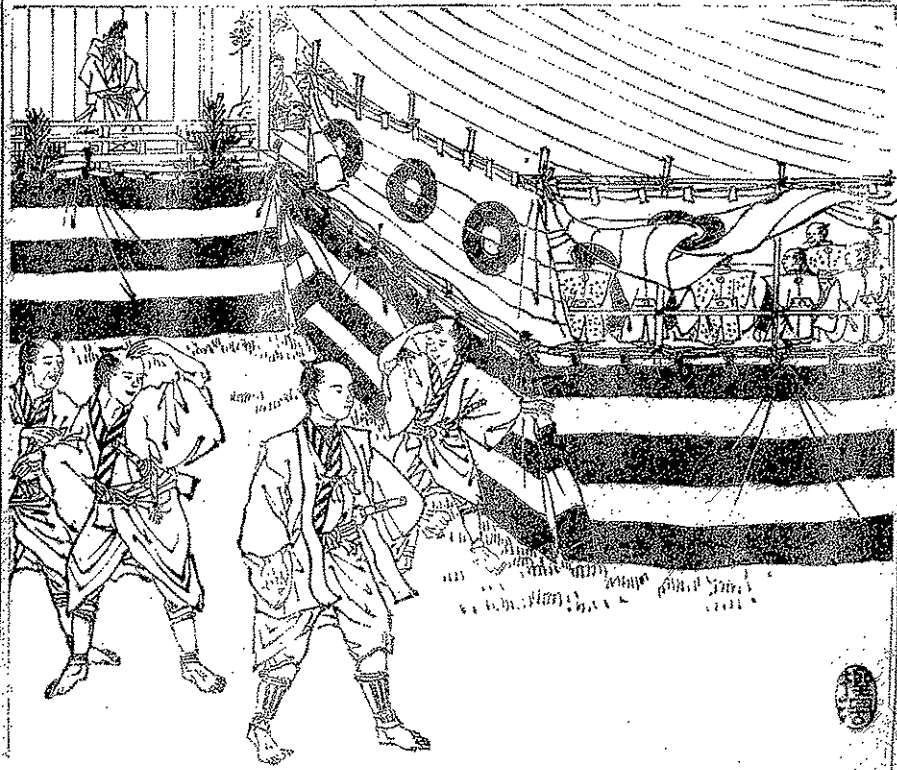
を平げて世の中

太平となりしこ

ろ肥後の城主加

藤清正家來と共

に能の舞を見物



せしとき多くの僕の中に鎖帷子をきて
脚甲をつけたるもの一人ありき。

清正はるかにこれを見て、此頃は世の中
穩にして人々遊にふけり、不時の備をな
すものなきに、かの僕がかく用心ぶかき
はめづらうき心がけなり、事あるときは
一かどの用に立つべきものなりとて、つ
ひに其僕に六十石を與へて、小姓役に取

り立てたり。この僕は出来助といひて、草履取といふ卑き身なり。が、うの心掛よかり。ゆゑ、遂に清正に見いだされて、かく立身したるなり。

遠き慮なければ必ず近き憂あり

第十四課 廉潔

人や、もすれば他人の富貴をうらやみて、わが身の貧賤をなげく。これまことに

きたなき心なり。人はれのく身分の程を知りて、うの身分に安んずることをむねとすべし。決して他人の身分をうらやむべからず。他人をうらやむときは、よろづに不足の念起りて、心つねに安からず。わが分に安んずれば、心靜にして、貧しき中にも樂あり。

大富は足ることを知るに在り

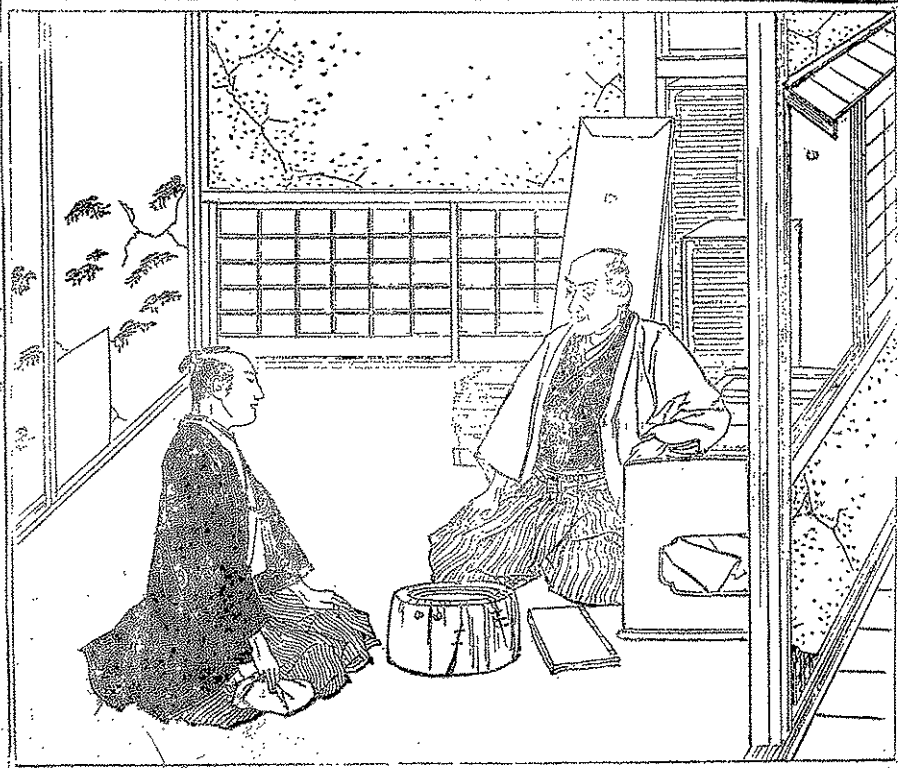
第十五課 佐藤直方

廉士も財を愛せざるにあらずこれを取るに
道あり

佐藤直方といふ學者あり、江戸にて人を
教へゝころ、家甚だ貧しくかりしかば、門人
の富めるもの氣の毒にれもひて、金子百
兩をふところにして直方の家に至り、を
りもあらばうの金を進めんとれもひた

り。

されど直方は、學
問の話のみにて、
家政のこととはこ
とばにもいだし
かりしかば、かの
弟子は遂にうの
金を進め得ざり



きとぞ。

第十六課 改過

人たれか過なからん。過をくりてたゞちにこれを改むるを、よき人の行とす。過とくりつゝも、これをかくさんどゝ、またはこれを改むるに意なきときは、其人次第にあゝき道にいり込みて、つひに大なる悪行をなすにいたるべし。つゝゝむべき

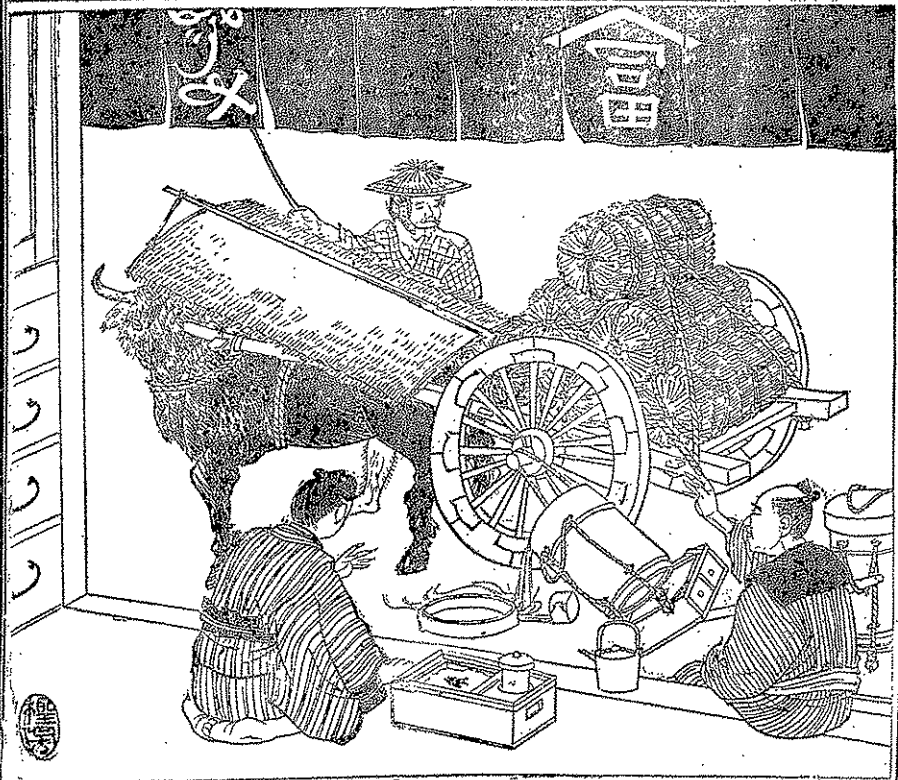
ことなり。

他人わが過をいふことあらば、まづ我身をかへりみて、うのあやまちを正すべし。決してうの人をうらむべからず。わがあやまちをいふは、わが師なりとれもふべし。

第十七課 土谷總藏の話

豊後國に土谷總藏といふものありき。性

質よからぬもの
なりゝが、あると
き寺にて説教を
聞きはぐめてあ
が行の悪かりゝ
ことを悟り、これ
より心を改めて、
生れかはりたる



如き善人となり、うのちは油を賣ること
を業とし、日々遠近を賣りまはりたり。
ある日いつもの如く油桶を路ばたにれ
きて、人の店さきにて休み居ゝに、牛車を
ひける男總藏の油桶につきあたりて、油
をとぼゝながら、うのまゝゆきすぎたり。
總藏の男をよびとゞめて、うなれたは他
人の油をとぼゝながら、一言のあいさつ

をもせずしてゆきすぎんとす、さほどの不實ものならば、定めて父母にも不孝ならん、あれも以前ならば、このまゝにはゆるすまじけれども、今は人であらうふことのあることを悟りたれば、汝の不實はゆるしやるべし、汝も今より心を改め、人の教を聞きて、わが行を改めよといまゝめたりとぞ。君子は身を省みて徳を修

むといふことあり。總藏の行これに近し。

第十八課 女子訓

女はすべて、やさしくしとやかなるべし。たちあるまひ、ことばづかひなどのあらくしきは、わけてみにくきものなり。さてやさしくしとやかなるうちにも、心のうち、たしかにして、みだりに動かされぬところなかるべからず。

人の妻となりては、よく舅姑^{きやくこ}をうやまひ、子どもををゝへみちびき、まためゝつかひにも目をかけてつかひ、諸事に儉約にして、家内の幸福をまさんことを心がくべゝ。一たび嫁入りゝ上は、うの家をわが家と定めて、いかなる辛苦にあふとも、立去るべからず。夫の不幸はわが不幸とれもひて、辛苦をともにすべゝ。

貞女兩夫に見えず

第十九課 河瀬春女

河瀬春女は五歳のとき母を失ひ、繼母に養はれゝ人なるが、うまれつき孝順にゝて、繼母に事ふること生母に異ならざりき。長ゝてのち、稻生恒軒^{いねんけん}といふ人に嫁入りせゝに、妻たる道を盡ゝよく舅姑をうやまひ、子弟ををゝへ、勤儉をまもりて、少

も無用の費を
なさず、婢僕にも
よくめをかけて
つかひたり。また
裁縫等は決して
人手に委ぬること
なく、一ツの器
を買ふにも、一ツ



の衣をつくるにも、必ず帳面に記し、れきて、
れちなきやうものゝたり。春女年七十
七にてみまかり、枕邊に一封の書面をの
こゝゝを、あとにて開きみゝに、身を修め
家を齊ふるをゝゝをかきのこゝたりと
り。

第二十課 修學

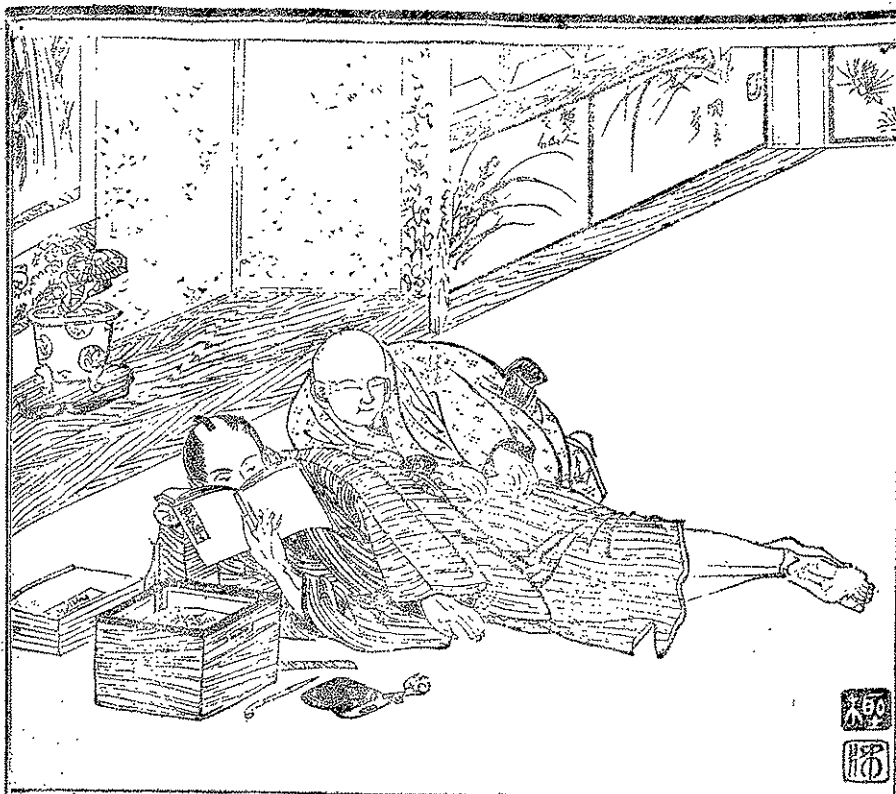
人は萬物の靈とてすぐれたるものなれ

ども、學問をつとめて智能を啓かざれば、賢き人となり難し。人とりまれて一生愚にて暮さんは、口をしき事ならずや。學問をつとむれば物の道理を悟り、廣く世の中の事を知りて、性質愚なるものも賢き人となるべし。されば幼時より寸陰ををしみて勉強し、萬物の靈たるに恥ぢざるやう心がくべし。

玉磨かざれば光なり、人學はざれば道をしらず

第二十一課 塙保已一

塙保已一は、七ツの時盲目となり、按摩の業を習ひしがあるときつらくれもふやう、あれ盲目なりとも、人なみにすぐれて勉強せば、學者となること叶はざるあけなしと。うれより人の足腰をもみなが



ら、心をとめて人の書を読むをささるて、よく諸誦たり。
さてうののち學問に力を盡せること一方ならず、目くらの事とて

萬事不便なるを事ともせず、久き間、たゆみなくつとめゝかば、はては目明きの人々、多く保己一の弟子となりて、學ぶことゝなれり。世には兩眼あれども、一文字をだに讀みえぬもの多し。はづづきことの限にころ。

學問は心の眼

第二十二課 勤勉

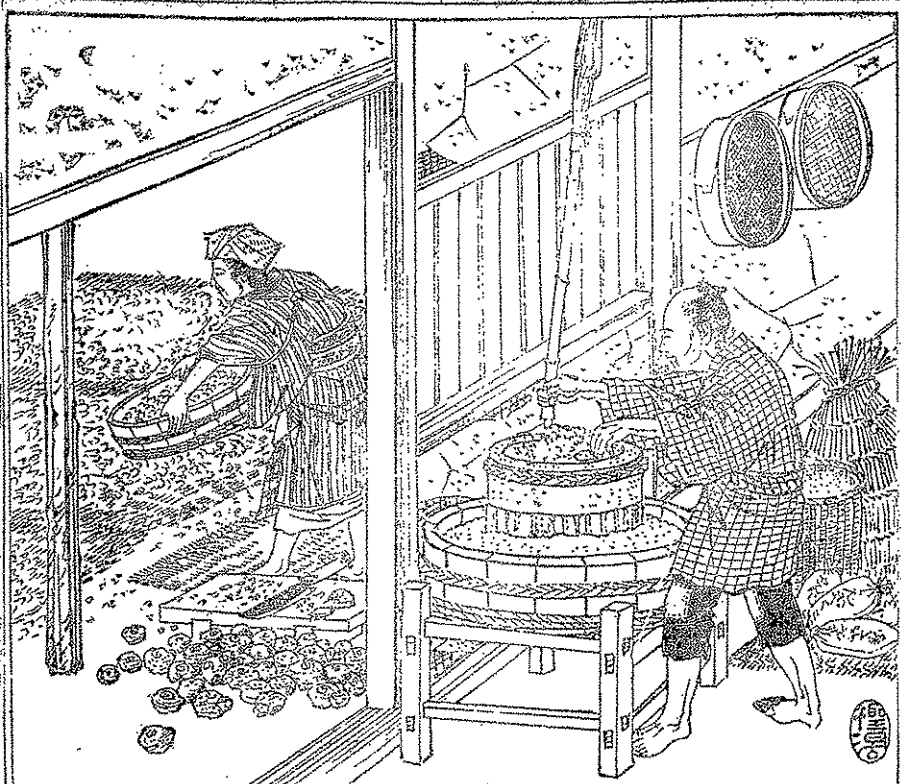
古語に「勤むれば貧に勝つ」といひ、また「勉むれば置ゝからず」ともいへり。言ふことゝろはつとむる人は必ず富むどのことなり。たより人に貧富の別あるは、天の禍福にはよらず、たゞ其人の勤むると勤めざるとによりて分るゝものなり。されば一日の日をもあだには過さず、業をはげみ家を興さんことを心がくべし。

人の職業には種々あれども、職業によりて貴賤の差別あるにあらず。されば各々の職業をつとめて、家を富さんことを務むべし。農夫の耕ゝて利を得るも、商人の商ひゝて利を得るも、皆勤勉のむくいなり。はじめに勤勉の種を蒔けばこそ、後に利得といふ實を結ぶなれ。怠惰にゝて利得をのみ得んとれもふものは、種を蒔か

ずして實をこひねがふにれなり。時かぬ種ははえぬといふ諺よく思ひ合すべし。

第二十三課 中島藤右衛門の事

なせばなりなさねばならずなるゑざをならずと捨つる人のはかなさといふ歌あり。世の中の事は勤めて撓まざるときは、大抵成就せざることなり。



中島藤右衛門は常陸國の人なり。うの住める村、山と山との間に挟まり、やせたる地にて、五穀みのらず、唯蒟蒻玉を生ずるのみにて、食

料いたりて乏しかりしを、藤右衛門あるとき思ふやう、こんにやく玉を精製して廣く世間に賣りひろめなば、村人の利益極めて大ならんど。これより心をこめて十年ばかり工夫し遂に製造の法を發明し、たほくの資をなげうちて、うのことを勤めたり。

かくて、藤右衛門がつくり出でし蒟蒻、や

うやく四方にひろまりしかば、村人みなこれにならひて作りいでし程に、後には一郡の産出高、一年三十万圓の多きにのぼり、寒村變じて富郷となるに至れり。

第二十四課 節儉

家を保つの道は勤と儉との二ツなり。勤勉して財を得とも、これを使ふに法なくば、家富むこと能はず。あるに任せて浪に

金錢を費し、衣食に奢るは、遂に家をほろぼす基なり。人の一生には、たもひがけなき難儀に出合ふこともあるものなれば、つねに無用の費をはぶき、相應の貯蓄をなす、不時の需に備ふべし。

またわが身はいかに不足なくとも、世には貧しき人多し。さるをわが慾をのみほし、いまゝにゝて、ひとりゝの快樂をむさ

ぼるは、まことにいやゝむべき心なり。財にあまりあらば、世のまづゝき人にめぐむべし。これ人たるものゝ道なり。

第二十五課 綾部道弘の儉約

衣服は寒熱をふせぎ、飲食は饑渴をすくひ、住居は風雨をしのぐを以て足るものなれば、人々たのゝ身分を守りて、みだりにたぐるべからず。すべて奢は、家を亡

す基なりと知るべし。

綾部道弘は學博く、智ふかく、且れやに孝行なる人なりしが、或る時道弘の子にうつくしき着物をれ



くりしものあり。されども道弘はうの衣服をきることをゆるさず、子どもらに訓へて、いはく、この衣服は汝等にさせよとて人の贈りたるものなれども、かゝるうつくしき衣服をきならふときは、次第に奢に流れて、なに事にも儉約し難きに至らん、うれ故にきることをゆるさぬなりといひたりとぞ。

恭儉これ徳なり

第二十六課 忍耐

忍耐の要は已に克つをもとゝす。已に克つとは、私慾のために心ひかるゝことなく、これをれさへゝづむることなり。たよる業をなすにあたり、最もさまたげとなるものは私慾なり。古より名高き人も、私慾のために事をやぶりたる例甚だれ

ほゝ。よく私慾をれさへはつる人ころ、つひに事を成ゝとぐるものなれ。

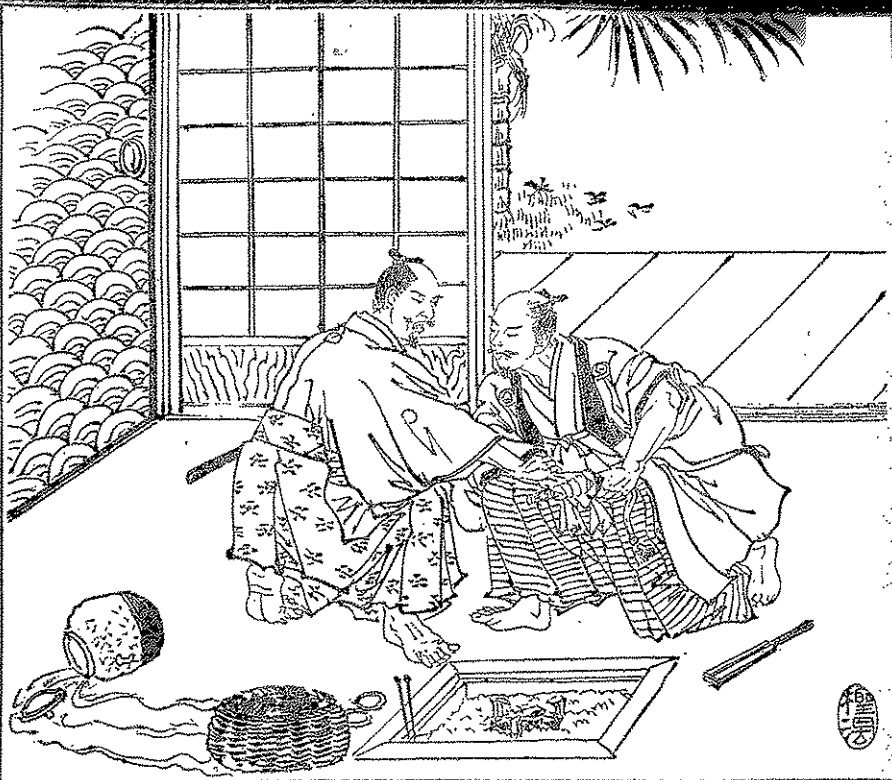
第二十七課 『底ひなき』の歌

ふかき淵は、水靜にゝて、うの底も知れざれども、淺き瀬には、水たちさゐぎて、やかまゝきものなり。さればむかゝのうたに、底ひなきふちやはさゐぐ山川のあさき瀬に、ころあだ浪はたて

とあり。人もまたこれと同づく、心ひろく
慮ふかき人は、ものにれちつきてかるが
ろゝからず、自ら人にも尊ばるゝものな
れども、心せまく慮あさき人は、すこゝの
ことにもあわてさあぎ、たがひて人に
もかるんぜらるゝものなり。

第二十八課 原田左馬之助

原田左馬之助は伊達政宗のけらいにて、



勇武のほまれあ
りゝ人なり。うの
頃政宗の召抱へ
ゝ武士に、後藤孫
兵衛といふもの
あり、ある時途に
て左馬之助にゆ
き逢ひ、あいさつ

せうに、左馬之助は氣付かずして行すぎたり。孫兵衛これより左馬之助をにくみ、無禮の振舞多かりうが、左馬之助は少くも尤めず、益々あつくもてなうたり。

孫兵衛いよく腹立ちて、かゝるへつらひものあるは、伊達家の恥辱なり、斬りてすつべうとて、左馬之助の家にゆき、あいさつをもせず、爐にかけありう茶釜をと

りて投げつけ、すぐに刀を引ぬかんとす。左馬之助其腕をれさへて、今われら二人さうちがへて死なば、伊達家武功の士一人もなきに至らんかゝる私怨のために主家を忘るゝ汝ともれもはざりうにといひうかば、孫兵衛はうめて左馬之助の度量に感ず、これより二人力を合せて、伊達家のためをはかれりとす。

うの量ひろきものはうの徳ひろく

第二十九課 報恩

恩を受けては必ずこれにむくゆべし。いかに小さき恩恵なりとも、必ずこれに報ゆる心なかるべからず。まゝて大なる恩恵をや。

わが大日本國民たるものは、まづ 天皇の洪恩をれもふべし。皇祖皇宗の國を創

めたまひより、世々臣民を撫育したまひし洪恩は、くばらくも忘るべからず。次には父母の恩なり。生みの恩と、養ひの恩と、いかに孝養をつくすとも、むくいがたかるべし。

次には師の恩なり。父母に代りてわが身ををくへ、われに生活の道を知らしめたるものなり。うの恩君父にひとし。

以上これを人の三恩といふ。かならずあ
するべからず。

第三十課 元助主恩を忘れず

赤穂義士四十七人の一人、片岡源五右衛
門の僕に、元助といふもの、幼き時より片
岡氏に事へて篤實勤勉のものなりしが、
源五右衛門江戸に來りて貧しく暮るゝ
ときも、元助のみはなほ従ひて、まめく

くつかへたり。
かくて一年ばかりありてのち、源
五右衛門同志の
もの四十六人と
主君の仇をむく
いんとて、なにげ
なく元助に暇を



とらせんとせうに、元助のわけをうら
ざれば、いづこまでもうたがひゆかんど
いひ、いかにさどくてもたちさらず。源五
右衛門困うはて、われ汝の爲すこと一
々氣にいらぬゆゑ、暇をやるなりと、こゑ
あらゝげて叱りうに、元助いよくなき
て、かく主人に見捨てられう上は、生くる
もせんうと、自殺せんとせうかば、源五

右衛門今はとて、やむことを得ず、これは
極めて秘密の事なれども、汝の志にかん
づて話すなりとて、やうくまことのこ
とを話し、かば、元助かつはよろこび、か
つはかなうみ、涙ながらに片岡の家をい
でゆきたり。うのち四十七士の人々、志
を果してかへりくる道に、元助はいでむ
かへて、蜜柑一箱をすゝめ、なほ人々のあ

とにゝたがひて泉岳寺まで見送りゝが、
四十七人の切腹せゝのちは、いかになり
ゝか定かならず、同ぐく片岡のあとをれ
ひて自殺せゝならんと其頃の人々いひ
あへりどろ。義士の家に義僕をいだす、ま
ことに世の美談といふべし。

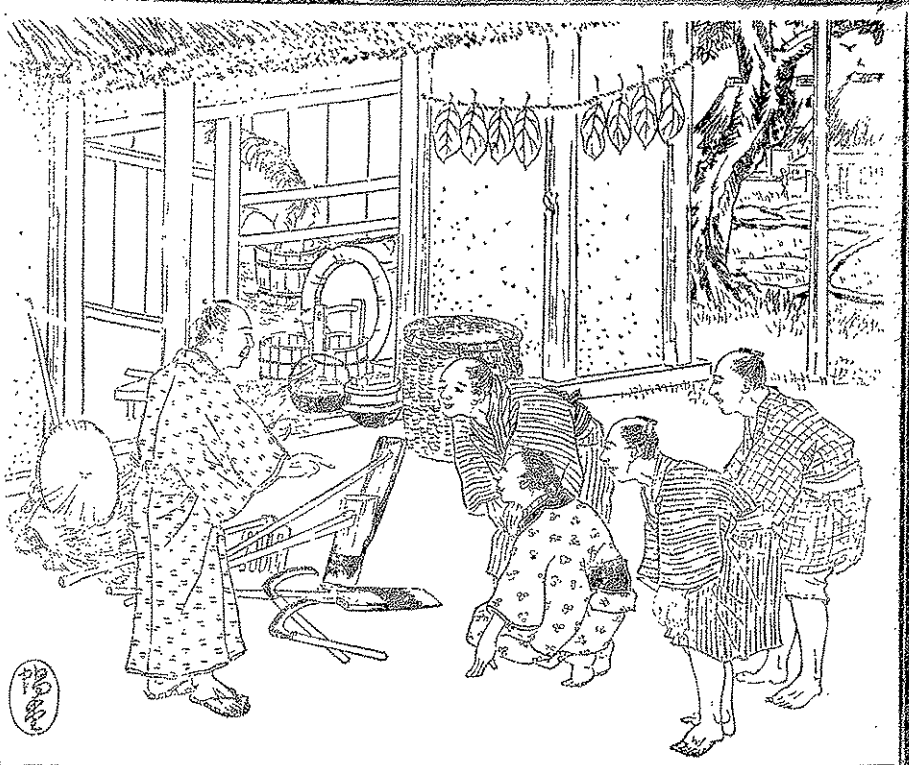
第三十一課 公益

家業をはげみて一家の計を立つるあひ

だにも、つねに公益といふことをあする
べからず。家業をつとむるに唯一身一家
を利せんとのみれもふべからず。ひろく
世人のため、國家のために利益をまさん
ことを心がくべし。もゝゐが身を利せん
がために、少ゝも他人の利益をれもはざ
るときは、必ず不義の事をも行ふにいた
り、かへりて禍を得べし。

荒れたる土地を開き、壊れたる道路を繕ひ、堤防を築き水流を便にする等、其他有益の器械を發明するが如きは、みな公益の大なるものなれば、これらのためには、其財と力とを吝むこと勿れ。

第三十二課 高橋傳五右衛門の事
高橋傳五右衛門は、信濃國佐久郡山部村の百姓なり。性質篤實なる人にて、よく先



祖のをゝへをまもり、衣服飲食はめゝつかひと同じきを用ゐ、つとめて儉約を守り、年々少ゝづゝの米を貯へて、凶年の備となせり。

この村は、めは人家もいたりて少かり
が、他國よりさまよひ來るものあると
きは、傳五右衛門よくうの人となりをし
らべたる上にて、家財農具をもちあ
へ、領主につげて村人となり、かば、のち
には他國の人にて、この村に永住せし
の、百四十戸の多きにいたれりといふ。
ののち、天明三年と六年との大饑饉には、

かねて貯へられる米を取出して施し、
かば、村人はいふに及ばず、隣村の人まで
も、爲に餓死を免れたるものばかりき
とす。

第三十三課 博愛

人に恩を施すほど、心樂しきことなり。世
には不仕合うちつゞきて、貧しき身とな
り、衣食にさへ事かくもの多し。これらの

不幸なる人々に物を施すは、なさけあるものゝ喜びてなすべき事なり。

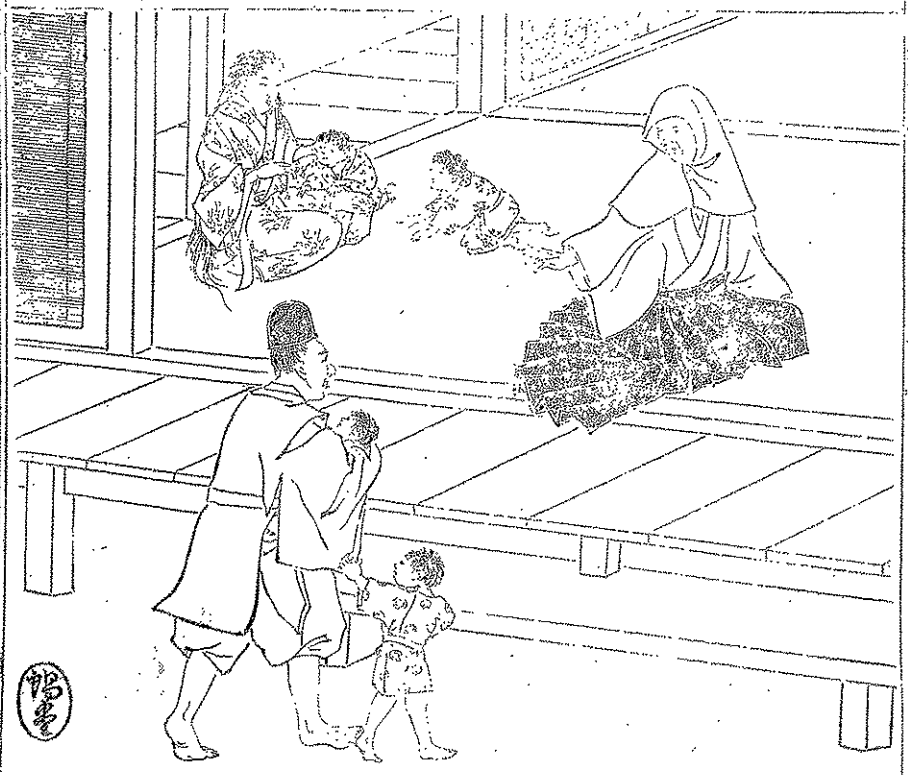
わが身ひとり富をかさねて、人の難儀をみぬふりするは、人情なき人といふべし。ことに、地震、洪水などにて人々多く難澁するときなどには、わが身分に應じて、財物をいだし、救助のとに力をつくすべし。

第三十四課

和氣法均のはなし

法均は和氣清麿の姉にて、志厚かりし人なり。うの頃藤原仲麿謀反をねこし、事顯れて罪に伏せしに、仲麿にくみして死刑に行はるべきもの數百人ありしを、法均慰みて、天皇にねがひ奉りて、盡くうの死をなだめたり。又ある年饑饉なる上に、惡病さへ流行して、人々難儀せしかば、子供を育てかねて捨つるものあまたあり

き。法均ふびんの
事にねもひて、人
を四方にいだく
て、棄兒を拾ひあ
げ、一々乳母を添
へて養ひ上げし
もの、八十三人の
多きにいたれり



といふ。

徳は仁より大なるはなし

第三十五課 剛毅

平生は温厚和平にして、かりにも疎暴の
振舞あるべからず。されどもつねに志を
養ひ、義理を重んじ、一旦の變にあひては
かたく其志を執りて動くべからず。かく
するをまことの剛毅とす。

剛毅なる人は、内に守るところ確にして、
獨立の氣象に富み、決して人に依頼する
ことなす。ゆるにいかなる變にあひても、
驚かず。獨立の氣象なきものは、他人に依
頼する心多く、たがひてわが志をまげ
ても、其人にこびへつらふに至る。これ人
たるもの、最も恥づべきことなり。

第三十六課 高田屋嘉兵衛

安政の頃、露西亞といふ國、日本との通商
をねがひて、未だ許されざりに、魯人ゴ
ロウ井ン等七人來りて、我國の商船を奪
ひ、蝦夷の海邊を測量せしかば、我國にて
は、七人のものを捕へて、獄屋につなぎれ
きたり。

この頃、高田屋嘉兵衛とて、蝦夷の地に漁
業を営みし人あり。あるとき、船子四十人

を従へて、函館の海邊を進みゆき、一
 發の砲聲とともに小船一艘近き來れり。
 うの船には數十の露西亞人乗り込み、
 て、皆銃を向け、劍をひらめか、嘉兵衛等
 をからめとらんとす。嘉兵衛すこしもさ
 わがず、大聲に叱りて曰く、我は大日本國
 の商人高田屋嘉兵衛なり、何者ぞわれに
 無禮を加ふると。露人等恐れて近かず、嘉



兵衛なほも船長
 にあひて、うの無
 禮を詰らんとて、
 かの船に乗り移
 りて、露西亞の軍
 艦にいたり、こと
 の由を聞糾、
 に、露西亞人はゴ

ロウ井ン等殺されるとき、あやまりて、この振舞に及び、こと判然せり。

嘉兵衛ののち我が官府にいたりて、ことの由をのべ、ゴロウ井ン等七人をゆるして兩國の和を結ぶべ、と説き、かば官府もつひに其請をいれ、ゴロウ井ン等をゆるし、事安穩に治まりたり。これ皆嘉兵衛が剛毅のなす所とて、歎稱せざるは

なく、露西亞人もふかく嘉兵衛の信義あつきに感づたりといふ。嘉兵衛は淡路國の人にて、幼き頃は人に雇はれて船子となり、人なるが、あまたの困苦を忍びてつひには其名を海外までも耀すに至れり。

第三十七課 名和長年王事に勤む
元弘の亂に 後醍醐天皇隱岐の國に遷

されねはせしが、勤王の師諸國に起ると
聞ゝめゝて、竊にこの島を遁れいでたま
ひ、伯耆の國にいたりたまひき。長年其頃
は長高といひてこのあたりの名族なり
ゝかば、天皇人を遣はゝてのたまはす
やう、朕今隱岐よりこの地に來りて、た
ゞ卿をたのみとせり、卿若ゝ勅を奉する
心なくば、この事を鎌倉に報ずとも心の

まゝにせよと。長年勅を聞きて涙を流し、
一天萬乗の君とゝて、うの御言葉ころか
ゝこけれ、長年一族どもをかりあつめて、
死力を盡ゝて護り奉らんには、近國の賊
ども恐るべき事かはとて、直に軍をひき
つれて、天皇を迎へ奉り、先づ寨を船上
山に築きて専ら防戦の用意をなゝたり。
あくれば賊將佐々木清高等、三千餘騎を



ひきゐて、攻め寄せゝが、長年計を以て之を討ち破りゝに、清高は命からぐ遁げ行きたり。近國の武士どもこのよゝを聞き傳へ、あれもくど、天皇の御味方に馳せ集りて、其數數萬に上れり。かゝるうちに都の賊も滅びたる由聞ゝかば、天皇は長年を護衛として、安らかに都にかへりたまひき。さて 天皇はこの度の

こと、一に長年が身をぬきんで、忠義を盡し、によれりとて、いたくその功績をほめたまひ親ら文を作り、歌を添へて長年にたまふ、その御歌に、

忘れめやよるべもなみのあらいうをみふねのうへにとめし心は

と遊ばされたり。又船上の船にちなみて、今より後は船を以て徽號とせよとて、帆

掛舟の畫をもたまはりしかば、長年かへすぐも皇恩の忝きに感激し、これより後も益忠勤をはげみて、度々のいくさに功名をあらはし、延元元年つひに討死を遂げたり。明治の初めの忠義を思召され、子孫を召し出して華族に列したまへり。

君に仕へて能く其身を致す

第三十八課 遵法

われ等が安全に月日をわくることを得るは、國に法律規則ありて、われ等が生命財産等を保護し、これを犯さんとするものをば罪するがゆゑなり。もうこの保護なき時は、ある者世にはびこりて、一日も安眠すること能はざるべし。この理を知らば、われらはつゝゝみてすべての法律

を守り、決して背くことあるべからず。

今の世はいまのみのりをかゝこみてけゝされこなひれこなふなゆめ

第三十九課 愛國

上に萬世一系の 天皇あり、下に千古不易の臣民あり、天皇は臣民を子の如くいつくゝみたまひ、臣民は 天皇を國の御親と尊ひたてまつり、上下相和し、君臣

相睦び、風俗淳美にして、人々節義を重んず。これわが國の古より君子國の稱ある所以にして、世界萬國其比類なきところなり。

我等は幸にこの國の臣民と生れたればつねに 天皇陛下の御爲に、この國を護りて、益この國の隆昌ならんことを心がけざるべからず。されば人々各其職業を

つとめて、納税の義務を怠らず、つねに德行を重んじて、天晴君子國の臣民たるをはずかりむべからず。又兵役の務に服しては、護國の任をつくすことを樂み、一旦事あらば、義勇公に奉じて一步も後にひくべからず。かくてこうまことの日本男兒といふべけれ。

すめらみくにのものゝふは、

いかなることをかつとむべき。

たゞ身にもてるまごゝろを、

きみとれやどにつくすまで。

第四十課 勅語を奉戴すべし

れづれれほくも、あか 天皇陛下は、明治二十三年十月三十日を以て、教育に關する勅語を下し賜へり。あれらこの國の臣民たるもの、何を以てかこれに答へまつ

らん。たゞ 大御勅のまに、これを行ひて忠良の臣民となり、以て天壤無窮の皇運を扶翼し奉るの外なし。この勅語の第一は、父母ニ孝ニとのたまへり。父母生育の恩は海山よりも大なるものなれば、人の子として孝養をあするべからず。孝は人倫の第一なればなり。次には兄弟ニ友ニとをいへたまへり。兄は弟を

愛し、弟は兄を敬し、兄弟親睦するを友といふなり。次には夫婦相和しとのたまへり。夫婦互によく和合して、いかも禮義を失はず、よく其家を保つべしとをうへたまへるなり。次に朋友相信じとは、朋友に交るに誠を以てし、詐を挟むことなかれとの聖旨なり。さて恭儉己ヲ持シ博愛衆ニ及ボシ、學ヲ修メ、業ヲ習ヒ以テ智能

ヲ啓發シ、徳器ヲ成就シ、進ンデ公益ヲ廣メ、世務ヲ開キ、常ニ國憲ヲ重ンジ、國法ニ遵ヒ、どのたまへるをば、かくこくも聖旨によりて略解を述べんに、禮義禮讓を守りて、輕卒の事をなさず、他人をあはれみ恵み、又學問を怠らず、藝術を勉めて、自らの智識を發達させ、よく徳行を磨くべし、かくして廣く世間の利潤となるべきことを

思慮して公益を圖り、また國の憲法はもとより、諸の法律を重んじ、苟も犯す事なかるべしとのとなり。さて又國に變事などの起りたるときは、すべての事をばうぢれきて、國を護らざるべからず。

大御勅に一旦緩急アレバ義勇公ニ奉じとのたまへるはこれなり。以上の事どもをつねづね忘れずに守るものは、忠良の

臣民なるがとのたまへるころ、いとかうとけれ。さればあれらは、一日たりとも、天皇陛下の御洪恩を忘るゝことなく、忠義を盡したてまつるをば、修身の第一義と心得、さて父母兄弟に對し、朋友または他人に對しては、常に大御勅のむねを服膺して、身の行をなすべし。この道は今古中外にあたりて、かはらぬ事、聖言に

ものたまへるが如く、われらが祖先のむ
かりより行ひ來りゝところなり。かへす
ぐも大勅語を捧讀するのみに止まら
ず、つねに聖旨のあるところを奉體して
これを躬に行はんことをつとむべし。ゆ
めゆめ怠ること勿れ。

小學修身經卷之四 終

明治二十六年十一月十四日印 刷
明治二十六年十一月十七日發 行
明治二十七年一月卅一日訂正再版印刷
明治二十七年二月三日訂正再版發行

小學修身經
尋常科生徒用

入門	定價金 參 錢
卷壹	定價金 五 錢
卷貳	定價金 七 錢五 厘
卷參	定價金 八 錢五 厘
卷四	定價金 九 錢五 厘

明治二十七年二月三日
文部省檢定
日八月二年七十七治明



編輯者
發行者
發兌元
印刷者
印刷所

天野 爲之
東京市麹町區土手三番町
廿九番地
小野 英之助
北豐嶋郡南千住町元地方橋場町
千三百八十番地
富山房書店
東京市神田區裏神保町九番地
電話番號千〇六十二番
橘 磯 吉
東京市京橋區弓町二十三番地
三協合資會社
東京市京橋區弓町二十四番地

図書 和図書 遡



a 1 3 8 0 8 3 9 8 1 1 a

福岡教育大学蔵書